

～安心して暮らせる地域社会をめざして～

## KSK じんかれんニュース

NO.71 2024年2月号



スマホの QR コードをかざすと  
「じんかれんホームページ」を  
読み取ることができます。

発行人 / 神奈川県障害者定期刊行物協会

〒222-0035 神奈川県横浜市港北区烏山町 1752 番地

障害者スポーツ文化センター横浜ホール 3 階

横浜市車椅子の会内

編集人 / NPO 法人じんかれん

(神奈川県精神保健福祉家族会連合会)

〒233-0006 横浜市港南区芹が谷 2-5-2

神奈川県精神保健福祉センター内

TEL 045-821-8796

FAX 045-821-8469

E-mail: jinkaren@forest.ocn.ne.jp

URL: <https://jinkaren.net/>

### 川崎の長男監禁放置死、父に猶予判決 保護責任者遺棄致死は無罪

2021 年、約 4 カ月にわたって長男を拘束し死亡させた(死亡時 37 歳)として、両親や妹ら家族 3 人を逮捕監禁容疑で逮捕するという、何とも、切なく痛ましい事件がありました。父親の自供によると精神疾患を患う長男は、全裸で徘徊するような状況で、他人に迷惑をかけてはいけないという気持ちから、やむを得ず拘束したとのこと。

長男の雄一郎さんは 2004 年ごろから自宅にひきこもり、11 年ごろから奇声を上げ、壁を壊し、暴力を振るうようになり、統合失調症の疑いがあると指摘を受けた。21 年 5 月、全裸のまま外に出て警察官が出動する騒ぎとなったことを機に、父親らは、その両手足を手錠や足錠などで拘束し、自宅に監禁。長男は同年 8 月に脳出血で寝たきり状態になり、同年 9 月 6 日ごろ、床ずれ部分からの感染症が原因で死亡した。22 年 1 月 31 日、父親らは逮捕監禁容疑で逮捕された。

横浜地裁は 2023 年 11 月 28 日、逮捕監禁罪について懲役 3 年、執行猶予 5 年(求刑・懲役 6 年)の判決を言い渡した。保護責任者遺棄致死罪は無罪とした。公判では、被告が介護問題を家庭で抱え込んでいたことが明らかになった。判決は、被告には長男が寝たきりとの認識がなく、体調の異常の訴えはなかったとする被告の供述を踏まえると、床ずれの進行を認識するのは困難だったなどとして、保護責任者遺棄致死罪は無罪とした。一方で、逮捕監禁罪については、約 4 カ月に及び、そのやり方も「明らかに

やりすぎだ」とし、「医療機関や保健所に相談して公的支援を受ける機会は幾度もあった」と指摘した。ただ、「約 10 年もの長きにわたり、異常な言動を繰り返す長男への対応に明け暮れ、精神的に追い詰められた」として、執行猶予付きの判決を言い渡した。逮捕監禁罪について争いはなかったが、実刑判決を回避した。

このような監禁事件は数年前、大阪でもありました。また、2019 年には元農水事務次官による一人暮らしの長男殺害事件がありました。家族は、近隣住民や不動産会社から苦情が来て対応に苦慮していたとのこと。

今から 80 数年前、日本の精神医学と精神医療の創始者としてよく知られている当時の東京帝国大学教授呉秀三は、「わが国十何万の精神病者は実にこの病を受けたるの不幸のほかこの国に産まれたる不幸を重ねるものというべし」という有名な言葉を残しています。この言葉ほど切実に精神障害者の運命を表現した言葉はないと思います。

精神疾患で入院する患者の人権擁護に取り組む「神奈川精神医療人権センター」(KP)顧問の佐藤光展さん(56 歳)は今回の判決に対し「支援が必要な家庭の孤立を防ぐため、支援体制を広げる必要がある」と訴える。

法廷では、父親が外聞を気にしていたことをうかがわせ、家族が長男を恐れていたとの発言が相次いだ。佐藤さんは「世間体や近所の目を気にして視野が狭くなり、抱え込んでしまったのではないかと推測。」「長男は追い詰められ、症状が悪化した可能性がある」と推測。「家庭で抱え込まず、一刻も早く医療機関につながるよう外部に相談して欲しかった。今の医療体制ならそれができる」とした上で、保健所の医師から長男に統合失調症の疑いがあると知らされた時点で、医療・福祉機関が「外部につながろうとしない『要注意の家庭』として継続して関わるべきだった」と指摘する。

厚生労働省によると、精神疾患のある患者数は増加傾向で、2020 年時点で約 615 万人に上る。佐藤さんは、日本の精神医療が過去の政策や偏見により、社会から精神疾患のある患者を「隔離」する状態が続いているとし、「保健所の訪問や精神科のオンライン診療を受けるなど、さまざまな手立てがある」と話した。

過去に統合失調症の治療を受けた経験があり、同センターで副会長を務める精神保健福祉士の堀合悠一郎さん(45 歳)は「一人で抱え込まず、他者と触れ合うことが重要」と呼びかける。

堀合さんは、保護責任者遺棄致死罪について無罪とした判決に「背景はあるとしても、無

罪が妥当なのかは疑問が残る」としつつ(治療の問題は)誰かに相談し、肩の荷を下ろすことが大切」と強調。

「家族や精神科医の支えがあり、安心して治療を受けることができた。精神科デイケアで他の患者やカウンセラーと出会い、救われた」と自身の経験を振り返る。図書館で本を借りたり、絵を描いたりしていたほか、体を動かすことで、睡眠やその後の回復につながったと言いつつ、「統合失調症の治療はさまざまだが、患者が安心して生活できる環境に加え、人や外の世界とつながることが大事」

約 10 年にわたり長男の世話を主に担っていた父親の胸中を「精神科に抵抗があり、治療につなげるのが難しかったのでは」と推し量りながらも「訪問看護を受けるなど外の世界と繋がり、適切な治療を受ければ長男が治癒する可能性はあったのではないかと話した。」

精神疾患そのもの、また抱え込んだ家族への無理解、孤立化は深刻です。悲惨で最悪な結果を招かないために社会に精神疾患への理解が、また家族も含めた支援が広がるようにしなければと思います。

一方、様々な事情で社会と繋がれない家族や個人をどう理解、支援していくのか、という課題も残されています。

2023.11.29 朝日新聞 DIGITAL / 2023.12.18  
神奈川新聞より まとめ三富



### 日弁連のイベントで堀合悠一郎 KP 副会長がスピーチ

KP(神奈川精神医療人権センター)の堀合悠一郎副会長が、日本弁護士連合会主催のイベント「精神障害のある人の未来をひらく集い」にパネリストとして参加し、スピーチを行いました。

みなさん、こんにちは。私は堀合悠一郎と申します。私は精神障害当事者です。10 代前半の頃、最初は睡眠のサイクルの乱れから、続いて、強い対人恐怖を感じ、その結果、社会的引きこもりを経験しました。ひたすら、不甲斐ない自分自身を責めていました。18 歳の時に精神科を初めて受診し、トータル 15 年以上のリハビリ、そして福祉的就労を経て、34 歳の時から障害者支援事業をおこなっている NPO 法人で常勤職員として働いています。私の働く立場は、日本では、時に「ピアスタッフ」と呼ばれています。

私自身は、精神科病院への入院体験はありませんが、これは環境に恵まれていたせいであり、場合によっては入院となってもおかしくなかったと思いますし、これまでに会った多くの当事者の仲間たちから、辛い入院体験の語りを沢山聞いてきました。

みなさまご存知の通り、日本の精神科病床数は世界最多です。その多くは民間が経営する単科の精神科病院であり、20 万人を超える非常に多くの当事者が今も、自由を剥奪された入院生活を送っています。入院に至るきっかけは、人それぞれですが、多くの当事者にとって、精神科病院への入院、特に強制入院は、心も体も傷つけられる非常に辛い体験として記憶されています。

なぜ、彼らは強制入院となったのでしょうか？ 手続き上、その入院要否の判断は精神科医の診断によります。そのためには、精神科医の診察を受けなくてはなりません、そこに至るまでの段階で、すでに、本人、加えて多くの場合、家族（しばしば親）が非常に辛い思いをしています。



そもそも、本人は、できれば精神科病院には入院したくないですし、家族も、できることなら本人に入院してほしくないはず。なぜならば、日本の精神科医療が長年とってきた「隔離・収容文化」と言ったら良いのでしょうか、これは、精神疾患のある本人を社会的に危険な存在とみなし、彼らを多くは強制入院によって病院に「隔離・収容」することで社会の保安をはかる、ということを経験の暗黙の合意とした文化だと私は考えます。



その「隔離・収容文化」が、一般の人たちに「精神科病院は危険な人を閉じ込める怖いところ」というイメージを植え付けてきました。これは本人に「自分は精神疾患を発症して社会から危険と見なされる存在となってしまったのか？」と、大変な負い目（セルフ・スティグマ）を負わせる社会の強い偏見です。とにかく、そうした精神医療の近づき難いイメージ、そして内なる偏見（セルフ・スティグマ）の前で本人や家族が思い悩み、本人が専門的なケアにつながるができずにいる中で、精神疾患の症状をはじめとした本人の状況が悪化すると、これは不眠や、過度の緊張や、周りから見て攻撃的と感じられる振る舞いなど、周りの人も辛く、本人もとても辛い、心身がすり減るような思いをするものです。

そしてもう、本人も同居家族も、自分達だけで本人の精神疾患に対処するのは不可能だと感じる時が来ます。これは、最後の手段として、精神科医療に頼るしかない、と。しかし、先にお話ししました精神科医療の暗い「隔離・収容」イメージがもたらす不安や恐怖は、これは決して家族の辛さを軽んじるわけではないとご理解いただきたいのですが、実際に入院することに

なりうる本人のほうに、より強く作用すると思われま

本人は、もう心も体も限界でも、入院は怖いのです。そこで、しばしば家族が、本人か家族か誰かの命が危険に晒されるという最悪の事態を避けるために、心を鬼にして、本人のことを無理やり病院に連れていくことで、なんとか本人を受診につなげることがあります。

ちなみに日本には、この「本人を無理やり病院に連れていく」ことをビジネスにしている企業も存在します。また、法律上に定められた、医師の診察のもと病院へ本人を移送して入院させる制度もありますが、手続きが厳重で時間を要するため、こちらは実際に適用されることは稀です。

そうして、本人は、緊張や不安、混乱で心身が張り裂けそうな中、入院となるのですから、まずはとにかく、速やかな手厚いケアが必要なのは、不安や恐怖感を引き起こすことのない、安心できる環境が何より必要なのは、しかし、日本の精神科医療では、しばしば、こうした場合に、「厳重な治療」が、強い鎮静作用のある薬物投与や、外から鍵がかかる保護室への隔離、そして時にはさらに、本人には解けない拘束器具を使用した身体拘束—これは場合によっては血栓症による死亡のリスクを伴う危険な処遇ですが—などの形で行われてしまいます。



これは、治療という名目のもとに、本人に更なる不安や恐怖、さらには命の危険を与え、また、本人のことを誰よりも大切に思っても入院中は常には会うことが叶わない家族や大切な人たちにも大変な不安や悲しみを与える、とても

癒しと呼ぶことはできない行為なのではないでしょうか。



しばしば、この「厳重な治療」は、他に選択肢がないかのように強制されます。実際、私の友人の一人は、診察室でスタッフに体を抑えられ注射をされる時、不安と恐怖から抵抗すると、さらに多くの屈強な病院スタッフに体を抑えられ、隔離先の保護室まで運ばれたといいます。鎮静剤を投与され、保護室に隔離された後、鎮静から意識が戻り、状態が落ち着いたとみなされ身体拘束を解かれ保護室から出ても、不安は続きます。病棟を見回すと、自分と同じように入院している人の多さに愕然とします。彼らと話をすると、ある人はもう何年も入院を続けていたり、またある人は強制入院で医師から退院は無理と言われていたり、さらには、とても落ち着いた雰囲気でもどこが病気なのかわからない様子の人が何年も入院している、などの事がわかります。「これだけ多くの人が何年も（長期）入院しているのだから、自分も、いつまでも出られないのかもしれない。」しかし、何故？と問わずにはられません。

代表的な強制入院には 2 種類あり、そのうち「医療保護入院」には、家族等の同意が必要となっていました。これは、最近の法改定で、家族等の同意や意思表示がなくても、自治体の首長の同意で入院とすることが可能となるようです。今までは、形式上、家族等の同意を得ることで、本人を強制入院させることの責任の所在が曖昧にされていました。実際、入院が必要との診断を下すのはあくまで精神科医であったにも関わらず、です。

入院した本人の中には、「家族が同意書にサインしたせいで、強制入院させられた」と感じ、

その後の家族との関係が悪化したり、場合によっては家族を恨んだりする事があります。責任の所在を曖昧にしたまま強制入院がなされてきたことの弊害を、本人と家族が受けてきたのです。今回、家族等の同意がなくても首長等の同意で強制入院が可能になることで、この「医療保護入院」—これは日本における精神科強制入院の大部分を占めますが—の本質が明らかになると思います。それは、とても見過ごすことのできないものです。

本人のリカバリーのためには、強制入院を優先することではなく、本人をはじめ、家族、精神保健医療福祉関係者（医師、看護師や作業療法士、ソーシャルワーカー、ピアサポーター等）の協働による地域ぐるみでの支援が必要かつ有効であり、それが本来あるべき精神医療の形だと思います。今日ここでの議論が、あるべき精神医療の形についての実践的な議論、そして行動を広げる一助になることを願います。ご清聴ありがとうございました。

(インターネット上のウェブサイトより 三富)



## 株式会社 潮（うしお）創業者 田中 俊孝氏

神奈川新聞に於いて昨年 10 月 2 日から 12 月 29 日まで 61 回に亘り連載されたコラムより、田中氏の信念・目標・価値観に基づく生きる姿勢が多く載せられた中で、その生き様に共感する部分を抜粋して掲載致します。



バイタリティー溢れる株式会社「潮」（横浜市金沢区）代表取締役 田中俊孝さんは、持ち前の行動力と鋭い観察眼で、「ハイブリッドファン」を開発。世界でも注目する企業になった。「ハイブリッドファン」とは、エアコンの吹き出し口に設置するもので、直接エアコンの風が人に当たらないようにしたり、空気をかき混ぜ室内全体の温度を一定に保ったりする機能がある。

みんな、発想はあっても行動していない。重要なのは、行動するか、しないかの違いだけだ。人生の価値は、自分の夢と希望に向かって挑戦することにある、と考えている。結果の良し悪しを問わず、一喜一憂せず、変化を恐れず、勇気を持って挑戦を続ける心の強さが大切だと思っている。父、恩師、友人、職場の同僚、先輩。私はこれまで多くの人と出会い、学び、導かれてきた。他人の振る舞いをよく見て、話を聞く。人間の口は一つなのに、耳が二つあるのはなぜか。自分が話をする倍、他人の話を聞かなければならないからだ。人間は、挨拶から始まって、

人との接し方、仕事の流儀など、その人の人間性がすべて「ふるまい」に現れる。そこには謙虚や感謝の心がなければならぬと私は考えている。どんな仕事も人間関係とコミュニケーションから始まる、というのが私の信念だ。信念と情熱と行動が人を動かす。私は特に「思いやり」「礼儀」「感謝」に強く共鳴する。私の人生で無駄などなかったと思う。挫折や失敗を含めても、全てが掛けがえない体験だった。反面教師を含めて「師」はどこにでもいた。すべてに感謝したい。

私は過去に 6 億円超の借金をしたが、自己破産をすることはしなかった。当時の私を支えていたのは「最後の 1 円まで返す」という約束を守る決意、人間としての信義、そして逃げないこと。つまり自分に負けない気持ちだった。ある本の一節も私を励ましてくれた。「人間に乗り越えられない障害はない。そういうものは天が人間に与えない。だから諦めるな。希望を持って。誠の心を尽くして行動していれば、いつかは必ず天に通じて認められる。」嫌なことに出くわした時、そこから逃げていると嫌なことはいつまでも残る。一番嫌なことは最初に片付けてしまえ。約束を守る。他人に迷惑をかけない。自分がやられて嫌なことは他人にしない。人は環境に左右されやすいが環境が絶対ではない。逆境から這い上がった偉人はいくらでもいる。大切なのは、揺るがぬ信念と行動力だ。

友人の言葉「俊ちゃん、山登りは人生と同じだよ、辛くて一步も進めない時、普段の歩幅でなくていいから 1 センチでも 1 ミリでも前に進もう。ここで諦めてはいけない。頂上にたどり着けば素晴らしい景色がみられるから。」

私は坂本竜馬を敬愛している。竜馬の魅力は「人は何とでも言わば言え。我が成すことは我のみぞ知る」という信念に基づく行動力と挑戦する勇気だろう。

勇気には挑戦する勇気と、引く勇気がある。その判断の過程で大切なのが相談できる相手だ。信頼に足る人は人生の宝になる。自分一人の知見など、たかが知れている。他人の経験に耳を傾け、考え、逃げずに決断する。



私は人生に最も必要なのは、目的、目標を明らかにしてその為の努力をすることだと思う。人は目標があれば生きていける。それが希望と夢につながる。生きるとは「限りある命という時間をどこに向けて使うか」ということでもあろう。年齢を重ね、経験を積むにつれ、周囲や先行きが見えるようになる。すると人間はどうしても守りに入り、臆病になる。臆病を打破するのは勇気だ。挑戦する勇気。逃げない勇気。

横浜市において多くの法人・会の役職を務めたが、組織の頂に立つ者は、常に反対や批判、攻撃にさらされる。平地から見た富士山の頂は、無風に見える。しかし実際には強風が吹き荒れているかもしれない。組織の「長」は、その覚悟をしておかねばならない。みんなのために、誠意と最善を尽くす。そのため苦労や忍耐は必ず花が咲く。

チャップリンのセリフに「この人生はどんなに辛くても生きるに値する。その為に必要なのは、勇気と想像力と少しの金だ！」

多くの師に恵まれた私だが、もう一つの私の「師」は本である。幼い頃から父に読書を勧められ、いろいろな本を読んできた。人生の折々、本に書かれていた一節、一行、時には一字一句が脳裏によみがえり、私に示唆を与え、道筋を示してくれた。本は人生の「羅針盤」だった。人の言葉と本。その教えが、ぴたりと重なることがある。「自信」が「確信」になる。

最後に私の造語を披露させていただく。「為法人」。「いほうじん」と読む。法(社会)と人のため、つまり、世のため、人のために生きる。これからも挑戦を続けたい。

(まとめ：三富)



## 歌手 研ナオコ 70歳のありのままのすっぴん人生！

NHK ラジオ深夜便より



舞台上、歌に益々元気な研ナオコさんが、NHK ラジオ深夜便にて、古希を迎える「すっぴん人生」を、明るく、楽しく語られた。

現在スキューバダイビングにはまっています。69歳で12メートルまで潜れるライセンスを取得。今後、学科と実技を勉強して30メートルまで潜れるライセンスを取り、深海の世界を堪能したい。スキューバダイビングは、背中に装着した空気タンクにより呼吸をしながら海や湖の水中に潜るレクリエーション・スポーツです。通常、水深15mから30m程まで潜水し、30分～1時間程度の水中遊泳を楽しみます。最近では魚や水中風景の撮影が人気です。今まで年齢を気にしたことはない。古希は自分の中では全くない。年齢を気にしていたら何もできない。まだまだやる事、やらなければいけない事が沢山ある。過去は出来るだけ振り返えない。楽しかったことより、辛かった事、悲しかった事が思いだされるから。今まで生きてきた自分の人生を否定しない。頑張ってきたそれまでの自分が可哀想だから。

『人生を楽しみながら生きるためのコツ』は、何か新しいことを始めるのもよし。続けていたことをやめるのもよし。勇気があれば何でもできます。どんなことでも、先入観や偏見を持たずに面白がるのが大切なんです。常に「自分は自分・人は人」という考えで生きている。

他人に迷惑を掛けなければ自分の自由。他人の真似をしたり、誰かのいう通りに動いたり、与えられたものを納得もせずうけいれたり・・・ということをしなかったのは、ただ自分をごまかしたくなかったんですよね。

ダンナと始めた You Tube「スッピンからフルメイク」が600万回再生された。「You Tube? 無理、無理!」なんて言っていたら何も始まっていなかった。

私終いの極意を聞かれて・・・

自分は終活を考えたことが無い。終活に否定的な訳ではなく、日々をしっかりと生きていることが大事なの。生きていれば色々面倒なことに直面するけれど、それでも自分の人生を生き抜くんです。私には、悩みや不満を受けとめてくれる寝食を共にする、心の広い女性マネージャーがいる。

自由に楽しく笑顔で今を健やかに生きる。身体的に動けなくなっても、動画配信をしていると思う。なぜなら200歳まで生きるのだから。この先を豊かに生きる。生きていれば、苦しいことより楽しいことのほうが多くあると信じて。これからは、もっともっと自分に素直に生きて行くつもり。そのために一番大事なものは何かと訊かれたらアタシは『勇氣』と答えます。

## お知らせ

京浜急行バスは、令和5年10月1日より、神奈川県発行の精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方で、横浜市及び川崎市を除く神奈川県内の同社路線バスを利用の場合、バスの運転手さんへ手帳の提示により、正式に普通旅客運賃が半額になります。

(高速バス、空港バス、定期券を除く。手帳の有効期限切れに注意)

詳しくは、京浜急行バス ホームページをご覧ください。

**じんかれん家族相談のご案内**

**【家族電話相談】**

◆研修を積んだ家族相談員による電話相談  
 毎週 水曜日 10時～16時 予約不要  
 ※水曜日が祝日の場合でも大丈夫です。  
 ☎ 045-821-8796  
 困っていること、悩んでいることなどお話し下さい。

**【面接相談】**

◆精神保健福祉専門家による面接相談  
 毎月 1 回 第 3 火曜日 13時～16時 要予約  
 ※第 3 火曜日が祝日の場合でも大丈夫です。  
 相談場所：相模原市南区 3-3-2  
 ボーノ相模大野サウスモール 3 階  
 「ユニコムプラザさがみはら」  
 ミーティングルーム  
 予約電話：火・木曜日 10時～16時  
 ☎ 045-821-8796  
 ※相談料無料・相談内容は秘密厳守します。

**『ユニコムプラザさがみはら』アクセス**

ボーノ相模大野

2F ショッピングセンター

北口サンデッキ

中央通路 ←

相模大野駅

3Fへ

3F  
ユニコムプラザさがみはら

サウスモール  
ショッピングセンター

小田急線「相模大野駅」中央改札口下車、北口サンデッキより、ボーノ相模大野方面サウスモールに直進、中央通路の途中に「ボーノ横丁」の看板があります。左折してエスカレーターで3Fへ・・・  
 駅改札口より徒歩3分

【編集後記】穏やかな新年の幕開けを願い、多くのかたが、神社仏閣にお参りに行った直後、最大震度 7 を観測した能登半島地震。その翌日には羽田空港にて、JAL が着陸時衝突、炎上するという事故が発生。自然災害と、人的災害が新年早々続けて発生。地震は、時と場所を選ばない、人知を超えた出来事かもしれません。神奈川では首都直下地震の切迫性が指摘されています。今回の地震は命を守る大切さを改めて突き付けました。災害発生時は自分で自分の命を守る自助です。命を守る備え再認識を！

一方、羽田空港の衝突事故は明らかにヒューマンエラーと言われる人為的ミスです。滑走路への誤侵入トラブルは毎年複数回発生しているとの事。過去に同様の事故を直前に回避したヒヤリハットをなぜ活かせなかったのか。

私たちの身の廻りは危険がいっぱいです。ヒヤリハットに遭遇したら、これらを「何事もなかったから」と安心して忘れるのではなく、何が原因だったかを調べ、危険を先回りして回避できるよう対策を講じることが大切です。家の中や家の周りで、つまずいたり滑ったりして転びそうになったことはありませんか。年を重ねるにつれて転びやすくなり、骨折などのケガをしやすくなります。骨折がきっかけで寝たきりになってしまうことも。転倒事故が起こりやすい家の中や周囲の危険な箇所をチェックしましょう。(階段に手すりをつける、浴室内や床を滑りにくくする、躓きやすい物の除去、等)

【車を運転する方、特に気をつけましょう】スピードの出し過ぎ、信号無視、一時停止無視、逆走、信号機のない横断歩道での歩行者無視、アクセルとブレーキの踏み間違い。 (三富)

じんかれんニュースは、神奈川県共同募金会の助成を受けて編集・発行しています。この機関紙を通じて精神障害保健福祉の向上に努めて参ります。募金にご協力頂いた皆さまに感謝申し上げます。